

下岩田石仏遺跡

— 県道塔ノ瀬十文字小郡線 歩道新設工事事業地内における発掘調査報告 —

小郡市文化財調査報告書第295集

2015

小郡市教育委員会

下岩田石仏遺跡

— 県道塔ノ瀬十文字小郡線 歩道新設工事事業地内における発掘調査報告 —

小郡市文化財調査報告書第295集

2015

小郡市教育委員会

序 文

本書は、小郡市下岩田地内において実施された県道塔ノ瀬十文字小郡線に係る歩道新設工事に先立って小郡市教育委員会が実施した下岩田石仏遺跡の発掘調査記録です。

調査範囲は狭く、下岩田における当時の様相を明らかにできた部分は必ずしも多くはありませんが、近隣での発掘調査例は少なく、当地の歴史の一部分が垣間見えた貴重な調査となりました。また、今回の調査地点は大刀洗町の下高橋官衙遺跡に近く、官衙との関連性をうかがわせる調査結果を得られました。

埋蔵文化財は、地域の歴史を語るうえで欠かせないものです。本書が文化財に対するご理解を得るものとして、地域の歴史に対する興味をもっていただくための材料として、さらには教育、学術研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査にご理解とご協力をいただいた地域住民のみなさま、そして現地作業にあたった地元作業員さんのみなさま、発掘調査を進めるにあたってお世話になった多くの方に感謝を申し上げ、序文といたします。

平成 27 年 3 月 27 日

小郡市教育委員会
教育長 清武 輝

例 言

1. 本書は、小郡市下岩田地内の県道塔ノ瀬十文字小郡線歩道新設工事に伴い、小郡市教育委員会が実施した下岩田石仏遺跡の文化財調査報告書である。
2. 現地調査は平成 26 年 1 月 20 日から同年 3 月 28 日、平成 26 年 9 月 24 日から同年 10 月 3 日まで実施した。調査面積は 1,500㎡である。
3. 遺構の個別実測は龍が行ない、遺構平面図、全体図の作成およびデジタルトレースは株式会社埋蔵文化財サポートに委託した。
4. 遺構の個別写真は龍が撮影を行ない、空中写真は有限会社空中写真企画に委託した。遺物写真の撮影は有限会社システム・レコに委託した。
5. 遺物の復元・実測・製図には担当者のほか、衛藤知嘉子、佐々木智子、久住愛子、宮崎美穂子ら諸氏の協力をえた。
6. 遺構実測図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。
7. 本書に掲載した遺物・実測図・写真は小郡市埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。
8. 本書の執筆・編集は龍が行なった。
9. 平成 25 年度は、調査区を A-1～4 区、B-1～4 区、C-1～6 区、平成 26 年を D 区として、計 15 区に分割して調査を実施した。調査時には遺構番号を各小区で完結させ割り振っている。報告時には割り振った遺構番号を A 区から D 区の 4 区でまとめ、各遺構には（ ）書きで調査時の遺構番号を記載している。

本文目次

第1章	調査の経緯と組織	1
	1. 調査の経緯	
	2. 調査の体制	
	3. 調査の経過	
第2章	位置と環境	2
第3章	遺跡の概要	4
第4章	遺構と遺物	6
	1. A区の遺構と遺物	6
	(1) 住居跡	
	(2) 土坑	
	(3) 溝	
	2. B区の遺構と遺物	8
	(1) 住居跡	
	(2) 土坑	
	(3) 井戸	
	(4) 溝	
	(5) 流路跡	
	3. C区の遺構と遺物	22
	(1) 住居跡	
	(2) 土坑	
	(3) 木棺墓	
	(4) 溝	
	4. D区の遺構と遺物	27
第5章	調査の成果	28

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)	3
第2図	下岩田石仏遺跡調査区配置図 (S=1/4,000)	4
第3図	A区 遺構全体図 (S=1/300)	5
第4図	A区 住居跡・土坑・溝実測図 (S=1/40)	7
第5図	B区 遺構全体図 (S=1/300)	9
第6図	B区 住居跡実測図 (S=1/40)	12
第7図	B区 土坑実測図① (S=1/40)	14
第8図	B区 土坑実測図② (S=1/40)	15
第9図	B区 井戸実測図 (S=1/40)	16
第10図	B区 溝実測図① (1号溝は S=1/40、2・3号溝は S=1/60)	18
第11図	B区 溝実測図② (S=1/40)	19
第12図	B区 住居跡・土坑・井戸・溝出土土器実測図 (S=1/4)	20
第13図	B区 流路跡実測図 (S=1/60)	21
第14図	B区 流路跡出土土器実測図 (S=1/4)	21
第15図	C区 遺構全体図 (S=1/300)	23
第16図	C区 住居跡実測図 (S=1/40)	24
第17図	C区 住居跡・溝出土土器実測図 (S=1/4)	25
第18図	C区 木棺墓・土坑・溝実測図 (木棺墓は S=1/30、他は S=1/40)	26
第19図	D区 遺構全体図 (S=1/100)	27

表目次

第1表	出土土器観察表	29
-----	---------------	----

図版目次

- 図版1① 下岩田石仏遺跡 遠景 (南上空から花立山を望む)
- 図版1② 下岩田石仏遺跡 遠景 (西上空から下高橋官衙遺跡を望む)
- 図版2① A区全景 (西上空から)
- 図版2② A-1区 (真上から)
- 図版2③ A-2区 (真上から)
- 図版2④ A-3区 (真上から)
- 図版2⑤ A-4区 (西上空から)
- 図版3① B-1区 (東上空から)
- 図版3② B-2区 (真上から)
- 図版3③ B区攪乱 (真上から)
- 図版3④ B-3区 (真上から)
- 図版3⑤ B-4区 (真上から)
- 図版4① C区全景 (西上空から)
- 図版4② C-2区 (真上から)
- 図版4③ C-3区 (真上から)
- 図版4④ C-4区 (真上から)
- 図版4⑤ C-5区 (真上から)
- 図版5① D区 全景 (東上空から)
- 図版5② D区 全景 (真上から)
- 図版6① A-3区 1号住居跡完掘状況
- 図版6② A-3区 2号住居跡完掘状況
- 図版6③ B-1区 1号住居跡完掘状況
- 図版6④ B-1区 2号住居跡完掘状況
- 図版6⑤ B-1区 3号住居跡完掘状況
- 図版6⑥ B-1区 1号土坑完掘状況
- 図版6⑦ B-1区 6号土坑完掘状況
- 図版6⑧ B-3区 12号土坑完掘状況
- 図版6⑨ B-3区 13号土坑完掘状況
- 図版6⑩ B-3区 14号土坑完掘状況
- 図版7① B-1区 1号井戸完掘状況
- 図版7② B-1区 2号井戸完掘状況
- 図版7③ B-1区 3号井戸完掘状況
- 図版7④ B-1区 流路跡完掘状況
- 図版7⑤ C-2区 1号住居跡完掘状況
- 図版7⑥ C-5区 2号住居跡完掘状況
- 図版7⑦ C-1区 木棺墓完掘状況
- 図版7⑧ C-1区 木棺墓完掘状況
- 図版8 出土遺物①
- 図版9 出土遺物②

第1章 調査の経緯と組織

1. 調査の経緯

下岩田石仏遺跡の調査は、「県道塔ノ瀬十文字小郡線」における歩道新設工事に先立ち、平成25年10月10日付けで福岡県久留米県土整備事務所から小郡市教育委員会に対して埋蔵文化財の有無の照会があったことを端緒とする。調査対象地の北側隣接地では、平成3年度に農業共済組合事務所建設に伴う発掘調査（『下岩田南諏訪遺跡』市報第115集）が実施されており、当地に関しても遺跡が存在する事が想定された。

小郡市教育委員会は、平成25年12月11日、12日の両日で申請地の試掘調査を実施し、大型の土坑やピットを確認したため、発掘調査を行なう必要がある旨を地権者である福岡県久留米県土整備事務所に回答した。その後双方で行なわれた協議の結果、開発予定面積2173㎡のうち、遺構が認められた範囲1600㎡を発掘調査対象地とした。平成25年度中に1400㎡、平成26年度中に200㎡の発掘調査および整理作業、報告書の作成を行なうことで合意し、平成25年12月27日付けで協定を締結、平成26年1月9日付けで平成25年度中の契約を締結し、平成26年1月20日から現地調査に着手した。平成26年度は平成26年4月1日付けで協定・契約を締結した。なお、平成26年度中に実施予定であった調査対象地のうち100㎡は年度内に構造物の撤去が行なえず、次年度以降に調査を持ち越すこととなった。

なお、遺跡名として「下岩田石仏遺跡」を冠したが、近接する「下岩田南諏訪遺跡」と同一遺跡であることは疑いようがなく、「下岩田南諏訪遺跡2」として調査を実施すべきであるが、該当地の小字名は「南諏訪原」であり、本来は「下岩田南諏訪原遺跡2」とするべきであろう。しかし、名称の違いから混乱をきたすおそれがあったほか、調査範囲が広いため、新規に調査区中央付近の小字名である「石仏」をつけ、「下岩田石仏遺跡」としていることをご了承いただきたい。

2. 調査の体制

下岩田石仏遺跡の調査体制は以下のとおり。

【平成25年度】			【平成26年度】		
小郡市教育委員会	教育長	清武 輝	小郡市教育委員会	教育長	清武 輝
	教育部長	佐藤 秀行		教育部長	佐藤 秀行
文化財課	課長	片岡 宏二	文化財課	課長	片岡 宏二
	係長	柏原 孝俊		係長	柏原 孝俊
	技師	龍 孝明		技師	龍 孝明

3. 調査の経過

下岩田石仏遺跡の調査経過を調査日誌より抜粋して記す。

平成25年度

平成26年1月20日A区表土剥ぎ開始、1月23日A区遺構掘削開始、1月24日B区表土剥ぎ、2月3日C区表土剥ぎ開始、2月7日委託測量による全体図作成開始、2月25日B-4区・C区空中写真撮影、3月10日調査区全景空中写真撮影、3月11日A区、B-2・3区空中写真撮影、3月17日C区1号木棺墓検出、調査区拡張、調査区の埋め戻し開始、3月17日流路掘削開始、3月18日B-1区空中写真撮影、3月28日完全撤収。

平成26年度

平成26年9月24日D区表土剥ぎ開始、9月25日掘削開始、10月1日完掘、空中写真撮影、10月3日完全撤収。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたって、下岩田区のみならず、福岡県農業共済組合連合会、福岡県久留米県土整備事務所には多大なるご協力とご理解をいただきました。記して感謝の意を表します。

第2章 位置と環境

下岩田石仏遺跡は小郡市を南北に貫流する宝満川左岸に広がる標高15~16mの台地上に位置する。近隣における発掘調査は、下岩田南諏訪遺跡以外ほとんど実施されておらず、周辺の歴史環境については不明な点が多い。旧石器、縄文時代の遺構・遺物は周辺で確認されておらず、詳細は不明である。

下岩田古野遺跡で実施されたトレンチ調査では、弥生時代中期前半と考えられる住居跡が1軒確認されているが、主軸方位等、詳細は不明である。そのほか石棺系石室が検出されている。副葬品等は出土しておらず、時期は不明である。石室の形態は小郡市西部の三国丘陵上に位置する花簗1号墳のものと類似していることから5世紀中頃と考えられている。そのほか小郡市埋蔵文化財調査センターで保管している資料に「岩田出土銅戈」とラベルの付いた銅戈が保管されている。詳細な出土位置は不明であるが、小郡市上岩田、下岩田の周辺で採集されたものであろう。

この台地上には干潟地区や上岩田地区に代表される奈良時代前後の遺構が広範囲に分布している。御原郡における官衙遺跡として、上岩田遺跡、小郡官衙遺跡、大刀洗町下高橋官衙遺跡が挙げられる。宝満川の左岸、上岩田遺跡の北西500mに所在する井上廃寺は、昭和36年に小田富士雄氏によって、方2町の寺域復元案が提示されている。出土、採取された古瓦は畿内山田寺系種先瓦をはじめ、高句麗、百濟、大宰府系の各種瓦で、創建時期は8世紀初頭頃と推定される。上岩田遺跡では同型品が出土するが、他の瓦当文を伴わない単純組成であり、井上廃寺に先行する寺院として基壇建物が重要視される。小郡官衙遺跡は、現在の小郡市中心部に位置し、官衙周辺の集落や官道の調査が進展しており、当時の総合的な地域史を論じることが可能となりつつある地域である。

当遺跡の約400m東には大刀洗町下高橋官衙遺跡が位置し、その東には官衙の続きと考えられる下高橋馬屋元遺跡が位置する。また、当遺跡の50m北に位置する下岩田南諏訪遺跡では、8世紀前後の掘立柱建物や土坑、古墳時代後期以降の溝、近世の溝が検出されている。1号建物のピットからは須恵器坏蓋の転用硯が出土しており、奈良時代以降の当地周辺の動向が次第に明らかになりつつある。

中世以降については、上岩田に所在する老松神社境内に石造の五輪塔があり、元徳2(1330)年、岩田庄の人々の安泰を祈って建立されたものと伝えられている。この岩田庄は小郡市井上、稲吉までを含む範囲である。稲吉元矢次遺跡は、鎌倉時代を中心として、平安時代から江戸時代に至るまでの掘立柱建物、土坑、土坑墓、井戸が検出された。溝から出土した多量の鉄滓や焼土、炭から小鍛冶が営まれていたと考えられている。中国・朝鮮半島からの輸入陶磁器が多く出土しており、東播系須恵質土器や常滑焼など搬入品も多くみられる。

近世に入ると、小郡市域は久留米藩によって鶴の保護区とされ、下岩田には鶴番小屋とよばれる鶴を監視する小屋が存在した。その詳細な位置は不明であるものの、本調査区から約200m南の台地裾部付近に位置していたものと推定されている。この鶴番小屋には丹波から来た吉兵衛家が鶴番を勤め、幕末・嘉永期まで7代続いたという。当該地の小字名にみられる石仏、阿弥陀堂などから、付近に寺院があったことが想定される。元禄10(1697)年の『久留米藩寺院開基』によると、九品宗東光寺が存在していたことが記されているが、寛延2(1749)年の『寛延記』には廃寺となったことが記されている。現在ではその痕跡はまったくみられない。

参考文献

- 速水信也 1997「下岩田古野遺跡」『埋蔵文化財調査報告書1』小郡市文化財調査報告書第115集
- 速水信也 1997「下岩田南諏訪遺跡」『埋蔵文化財調査報告書1』小郡市文化財調査報告書第115集
- 赤川正秀 1993『下高橋上野遺跡』大刀洗町文化財調査報告書第5集
- 赤川正秀 2010『下高橋遺跡Ⅷ』大刀洗町文化財調査報告書第48集
- 小郡市史第1巻 通史編 地理・原始・古代
- 小郡市史第2巻 通史編 中世・近世・近代



1. 下岩田石仏 2. 下高橋官衙 3. 上岩田 4. 小郡官衙 5. 三国小学校 6. 一ノ口 7. 小郡中尾 8. 津古上ノ原 9. 三沢牟田々
10. 干潟向畦ヶ浦 11. 大崎井牟田 12. 津古土取 13. 横隈山 14. 力武内畑 15. 横隈北田 16. 横隈鍋倉 17. 三国の鼻 18. 津古内畑
19. 大板井 20. 横隈中内畑 21. 横隈狐塚 22. 津古生掛 23. 津古2号墳 24. 津古1号墳 25. 三沢畝道町 26. 寺福童 27. 大崎中ノ前
28. 小坂井屋敷 29. 大崎中園 30. 津古片曾葉 31. 福童町 32. 小坂井屋敷 43. 花簞2号墳 34. 花簞1号墳 35. 横隈山古墳 36. 三沢栗原
37. 井上薬師堂東 38. 井上北内原 39. 花立山古墳群 40. 花立山穴観音古墳 41. 三沢古墳群 42. 三沢京江ヶ浦 43. 干潟城山
44. 小郡大原町 45. 小郡前伏 46. 松崎六本松 47. 稲吉元矢次 48. 横隈仕解田 49. 大保龍頭 50. 小郡正尻 51. 大保西小路 52. 小郡野口
53. 福童山の上 54. 三沢権道 55. 井上薬師堂 56. 三沢寺小路 57. 津古空前 58. 北牟田 59. 横隈十三塚 60. 三沢古賀 61. 力武宮脇

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

第3章 遺跡の概要

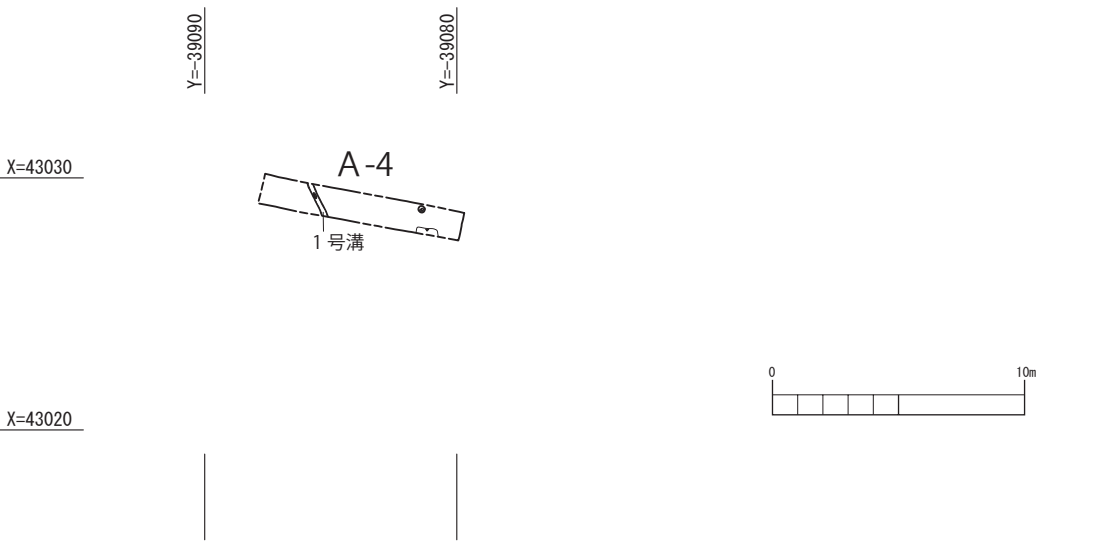
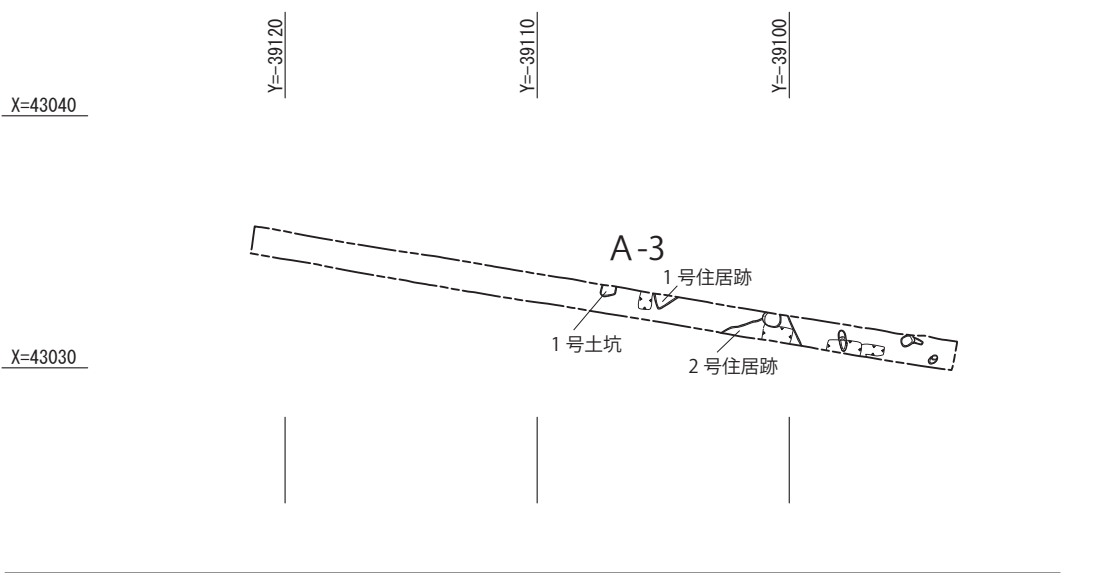
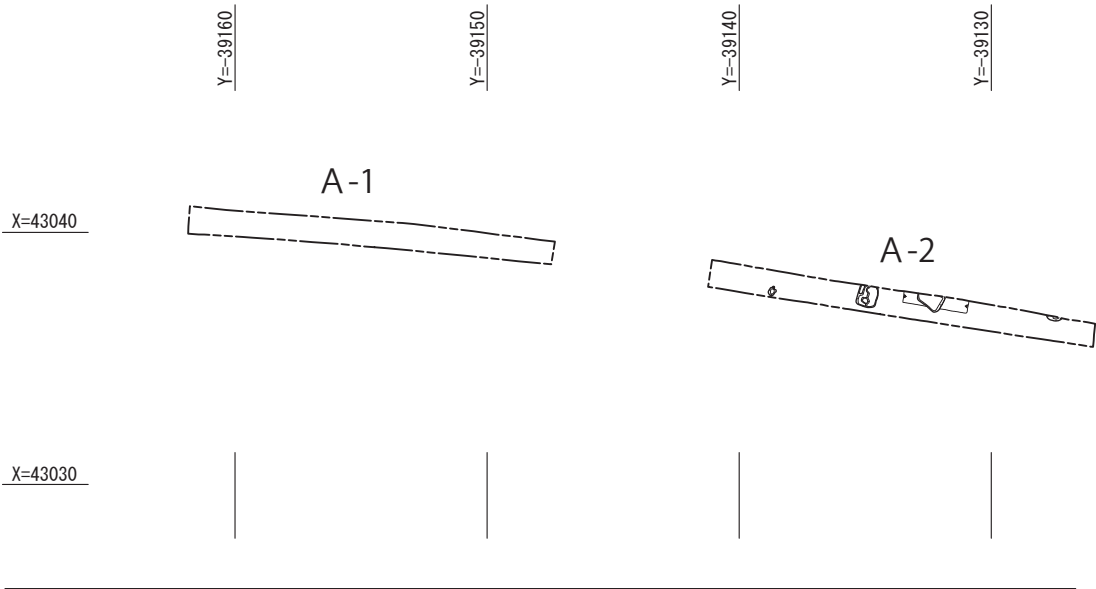
下岩田石仏遺跡の調査対象地は、総延長約 630 m、幅約 3.5 m である。隣接する南側の県道は交通量が多く、北側は畑地で耕作が行なわれており、また廃土置き場が確保できなかったこともあって、実際に調査を実施できたのは幅 1.2 m ほどである。狭長な調査区であったが、検出された主な遺構は、竪穴住居 7 軒、土坑 19 基、井戸 4 基、木棺墓 1 基、溝 19 条、流路 2 条、ピット約 400 基である。出土量こそ少ないものの、弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期から古代、中世、近世の遺物が出土している。

基本層序は、表土の耕作土、耕作に伴う床土の直下が暗褐色土を呈する包含層であり、この層から切り込む中・近世の遺構がわずかにみとめられるが、耕作により削平されほとんど残存しない。この包含層下の暗褐色土層に古代以前の遺構面がみとめられる。この古代以前の包含層より下には褐色粘質土が堆積し、以下淡黄橙色粘土層、明黄褐色微砂層、暗赤褐色粗砂層の花崗岩ばいらん土からなる基盤層となる。

下岩田石仏遺跡の立地する台地の西端は、大きく削平を受けており、遺構は残存していない。調査区は道路に面した耕作地であったため、耕作用機械の進入路を確保する必要があったほか、耕作に起因する削平・攪乱が部分的に認められ、耕作地へ水を供給する井戸から延びる導水管が耕作土直下に張り巡らされていた。以上のことから調査区は分割せざるをえず、西から上面の削平が著しい A 区、もっとも遺構の残存状況が良好な B 区、やや離れて、地形の起伏に富んだ C 区の 3 区に大きく分割し、さらに耕作用機械の進入路、農道、攪乱による未調査箇所等によって各区を分割し調査を実施した。調査区の関係から遺構面すら確認できなかった箇所も多い。



第2図 下岩田石仏遺跡調査区配置図 (S=1/4,000)



第3図 A区 遺構全体図 (S=1/300)

第4章 遺構と遺物

1. A区の遺構と遺物

調査対象地の西側から1～4区に分割し調査を実施している。1～3区は現況道路面より約1 m下で遺構面を検出している。1区のすべてと2区の西側半分までは上面削平により遺構が残存していない。3区も遺構の残存状況は悪い。4区は1段高い地点に位置するが、検出された遺構はわずかである。A区から出土した遺物はわずかで、図示しえたものはない。

A区の旧地形は上面削平のため詳細は不明であるが、2区で検出された住居跡の残存状況および4区遺構検出面の標高から西側へと緩やかに傾斜する台地縁辺部に位置すると考えられる。1区は標高13.9～14.1 mで基盤層の花崗岩ばいらん土を耕作土直下で確認した。2区は標高14.3～14.5 mで遺構面を検出している。3区も西側半分は遺構がみられず、基盤層の花崗岩ばいらん土であり、上面は削平されている。遺構検出面は標高14.3～14.7 mである。4区は遺構検出面の標高が15.6～15.7 mとA区でもっとも高いが遺構数はわずかである。

(1) 住居跡 (第4図 図版6-1、2)

1号住居跡 (A-3区 SC1)

A-3区で検出された方形プランの遺構である。遺構のほとんどが調査区外に続く。深さは17cmを測る。貼り床と考えられる硬化面は確認できなかったため、住居でない可能性がある。2号住居跡の存在から住居跡の可能性のあるものとして報告する。出土遺物はない。

2号住居跡 (A-3区 SC2)

1号住居跡と同様にA-3区で検出された。1辺2.75 m以上の方形プランを持つ竪穴住居と考えられる。上面のほとんどが削平されており、深さは最大で8 cmほどしか残存していない。検出面直下で貼り床を確認している。出土遺物はいずれも細片であり図示しえなかった。

(2) 土坑 (第4図)

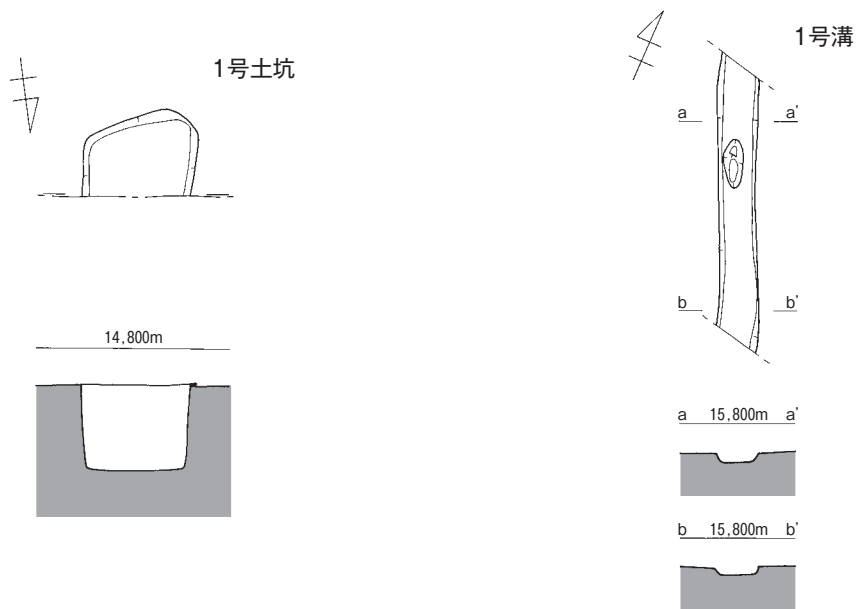
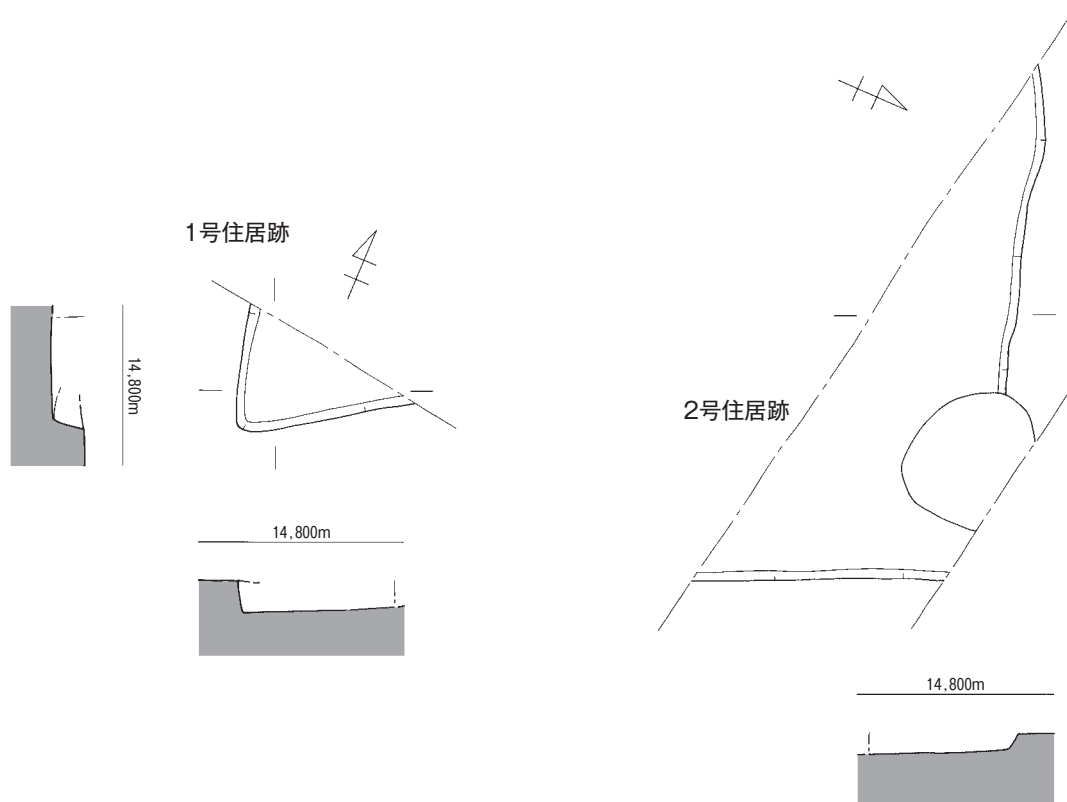
1号土坑 (A-3区 SK1)

3区で検出された土坑である。北側は調査区外へと続く。平面プランは残存部からやや不整形な方形もしくは長形状を呈するものと想定される。幅49cm、深さは44cmを測る。土師器甕、壺が出土したが細片のため図示しえなかった。

(3) 溝 (第4図)

1号溝 (A-4区 SD1)

4区で検出された溝である。上面のほとんどが削平を受けており、埋土は最下層しか残っていないものと考えられる。残存している幅は20cmで、深さは最大で5 cmを測る。出土遺物なし。



第4図 A区 住居跡・土坑・溝実測図 (S=1/40)

2. B区の遺構と遺物

A区と同様、西側から1～4区に分割して調査を実施した。現況道路面とほぼ同じ高さで遺構面が検出されている。上面はわずかに耕作によって削平を受けているが、遺構の残存状況は良好である。調査対象地内には農業用導水管が随所に張り巡らされており、調査が実施できなかった範囲がある。

1区は西端で導水管を確認したため、一部調査を実施していない。2区は東側で耕作用の導水管があり、大きく攪乱を受けている。調査区がせまいこともあり、導水管下に遺構が残っているかの確認はできなかった。3区は南壁に直線的な攪乱が入っており、道路脇の側溝の掘り方と考えられる。本調査区内でもっとも遺構の残存状況が良好な調査区であり、ピットの切り合いが著しい。調査区内でもっとも標高が高い地点である。検出面で標高15.2～15.5 mを測る。4区検出面での標高は14.3～15.0 mを測り、東側へ緩やかに傾斜する地形となる。

(1) 住居跡 (第6図 図版6-3～5)

1号住居跡 (B-1区 SC1)

1区で検出した方形プランと考えられる竪穴住居である。6号土坑を切る。調査区と平行する軸を持ち、東西壁の一部が調査区にかかっている。主軸方位はほぼ南北方向である。現況で幅3.89 m、深さは最大26 cmである。貼り床が施されており、支柱穴と考えられるピットが2基確認できるほか、支柱穴間には、長軸77 cm、短軸59 cm、深さ35 cm程の平面プラン楕円形の屋内土坑がみとめられる。須恵器坏蓋が出土している。

出土遺物 (第12図 図版8-1)

1は須恵器坏蓋である。焼きぶくれによる歪みが大きい、復元口径17.2 cmを測る。口縁部は強く屈曲し、三角形を呈する。

2号住居跡 (B-1区 SC2)

1区で検出された方形プランと考えられる竪穴住居である。7、8号土坑に切られる。貼り床は硬化面がやや弱く、埋土と似るため非常に不明瞭であった。北壁付近には焼土塊が残存しており、カマドが併設されていたようである。カマドは調査区外へと続く。残存していた焼土塊の位置から馬蹄形を呈する造り付けカマドと考えられる。カマドの前面には赤色硬化した浅いくぼみがみられる。土師器坏、鉢、焼成の甘い須恵器大甕片が出土しているが復元できず図示しえなかった。図示しえたものは須恵器坏蓋1点である。

出土遺物 (第12図 図版8-2)

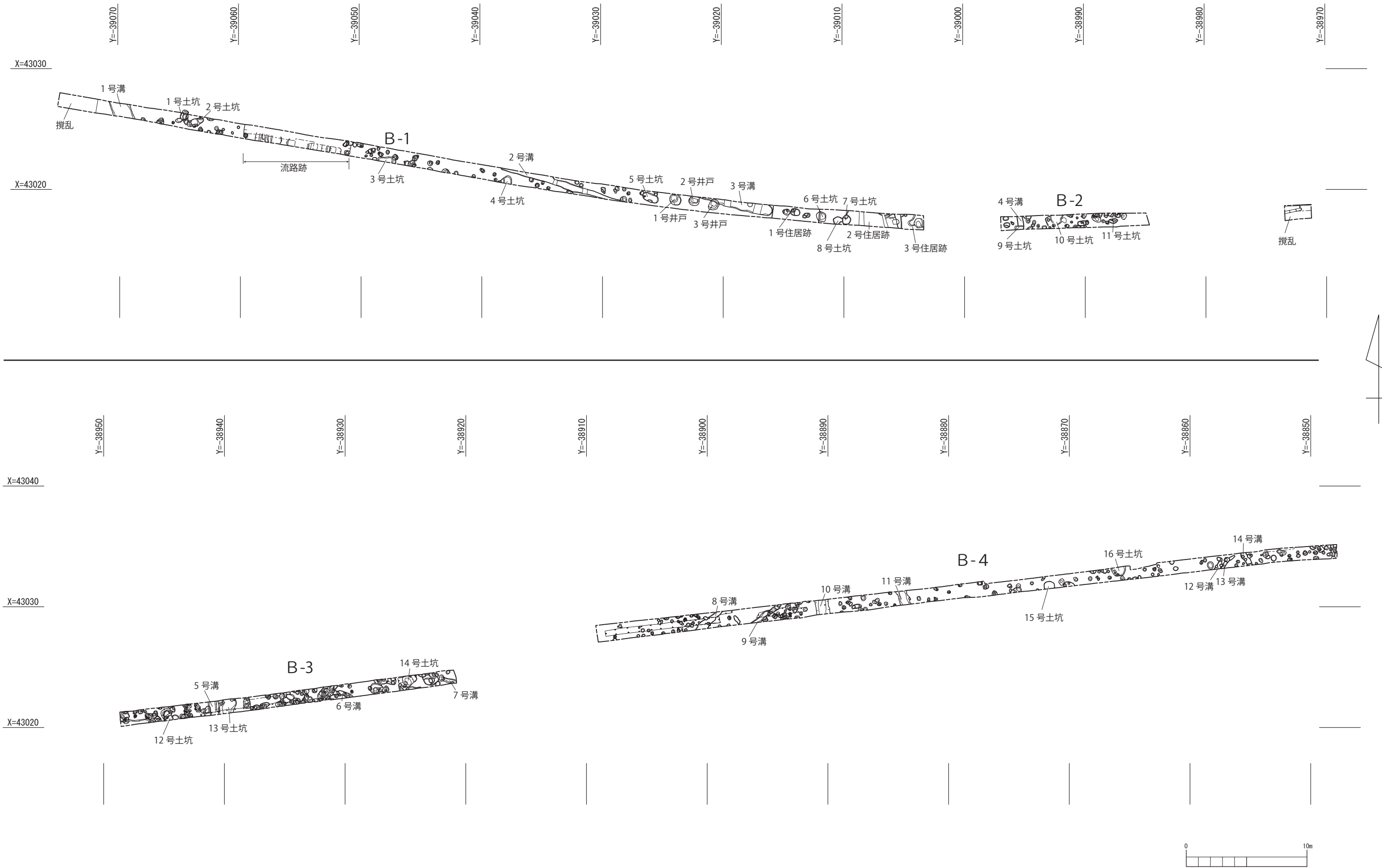
2は須恵器坏蓋である。口縁端部は丸みを持ってかえりをつける。復元口径12.6 cmを測る。

3号住居跡 (B-1区 SC3)

1区東端で検出した住居跡である。現況で1.87 m、深さ28 cmを測る。東側以外は調査区外へと続く。床面には北西端と東側にテラス状の高まりがみられる。主軸方位は1号住居跡と近く、ほぼ南北方向である。須恵器甕が出土している。

出土遺物 (第12図 図版8-3)

3は須恵器甕である。頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、口縁部まで緩やかに外反しながらのびる。口縁端部には平坦面をもつ。復元口径は25.8 cmを測る。



第5图 B区 遺構全体图 (S=1/300)

(2) 土坑 (第7、8図 図版6-6~10)

1号土坑 (B-1区 SK1)

1区で検出した土坑である。平面プランは不整形でピットの切り合いである可能性がある。2号土坑に切られる。長軸1.03m、短軸65cm、深さは最大で41cmを測る。土師器甕、壺が出土した。

出土遺物 (第12図 図版8-4)

4は壺である。頸部以下が失われているが、直線的にのびる頸部から外反し、口縁端部まで直線的にのびる。頸部には断面三角形の突帯が貼り付けられ、突帯下部には接合時の指頭圧痕がみられる。5は甕である。内面は剥離しており調整不明。口縁部内面から外面はハケメが施される。口縁端部は平坦面をもつ。

2号土坑 (B-1区 SK2)

1号土坑を切る平面プラン楕円形の土坑である。長さ1.51m、幅66cm、深さ51cmを測る。須恵器坏蓋が出土した。

出土遺物 (第12図 図版8-5)

6は須恵器坏蓋である。口縁端部から丸みをもつ天井部にそのままかえりをつける。外面天井部には同心円状の剥離痕が残っており、つまみがつくものと考えられる。

3号土坑 (B-1区 SK3)

1区流路跡の東側で検出された土坑である。ピットに切られ、南側は調査区外へと続く。平面プランは隅丸長形状を呈する。長軸1.49m、短軸48cm以上、深さは最大で21cmを測る。土師器坏が出土した。

出土遺物 (第12図 図版8-6)

7は土師器坏である。全体にローリングを受けており調整不明瞭。

4号土坑 (B-1区 SK4)

1区で検出された平面プラン不整形の土坑である。南側は調査区外へと続く。残存部で長軸1.18m、短軸65cm以上、深さは15cmを測る。土師器甕が出土した。

出土遺物 (第12図 図版8-7)

8は甕である。外面は縦方向のハケメ、内面は下から上方向のケズリが施される。口縁端部は丸くおさめる。

5号土坑 (B-1区 SK5)

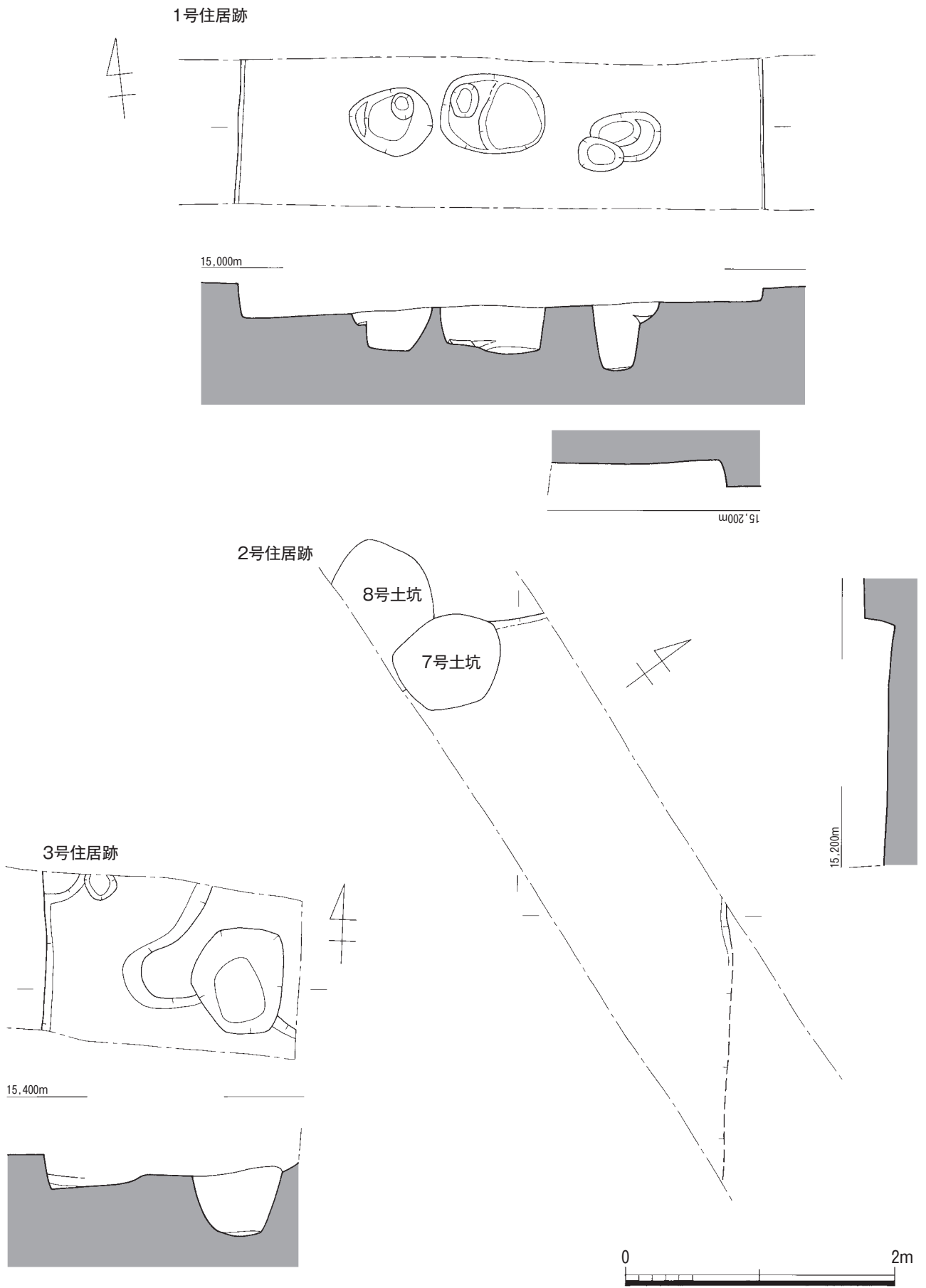
1区のほぼ中央で検出された平面プラン楕円形の土坑である。長軸137cm、短軸68cm、深さ10cmを測る。出土遺物なし。

6号土坑 (B-1区 SK6)

1号住居跡に切られる。平面プラン楕円形の土坑である。長軸90cm、短軸77cm、深さは最大で56cmを測る。出土遺物なし。

7号土坑 (B-1区 SK7)

2号住居跡、8号土坑を切る。平面プランはやや楕円形を呈する土坑である。北側にピット状の落ち込みをもつ。長軸79cm、短軸71cm、深さは最大で38cmを測る。出土遺物なし。



第6图 B区 住居跡実測图 (S=1/40)

8号土坑 (B-1区 SK8)

7号土坑に切られる土坑である。平面プランは残存部分では楕円形状となるが、調査区外へと続くため、全形は不明である。北西壁は垂直気味に立ち上がる。内側はテラス状となり、南西側でピット状の落込みがみとめられる。出土遺物なし。

9号土坑 (B-2区 SK1)

2区西端で検出された土坑である。残存部の平面プラン隅丸長方形で4号溝に切られる。長軸74cm、深さ25cmを測る。出土遺物なし。

10号土坑 (B-2区 SK2)

2区で検出された土坑である。攪乱、ピットに切られるが、平面プランは隅丸の長方形状となろうか。長軸で1.47m以上、短軸で92cm、深さは最大で18.5cmを測る。出土遺物なし。

11号土坑 (B-2区 SK3)

2区東端で検出された。土坑としたがピットの切りあいの可能性がある。平面プランはやや不定形の楕円形状を呈する。長軸78cm、短軸42cm、深さは最大で45cmを測る。土師器坏細片が出土したが図示しえなかった。

12号土坑 (B-3区 SK1)

3区で検出された土坑である。南側は調査区外へと続く。平面プランは隅丸の長方形となろうか。南側にテラス状の段をもつ。長軸1m以上、短軸で75~84cm、深さは最大で56cmを測る。土師器高坏、鉢が出土した。

出土遺物 (第12図 図版8-8)

10は土師器鉢である。口縁部外面にナデ調整で余った粘土が貼りつく。内面は単位の細かいハケメ調整であるが、一部不明瞭である。11は高坏口縁部である。焼き歪みのため、口径不明。

13号土坑 (B-3区 SK2)

3区で検出された土坑である。南北ともに調査区外へと続く。短軸149cm、深さは最大で20cmを測る。最上層で甕、下層で甕底部が出土した。

出土遺物 (第12図 図版8-9)

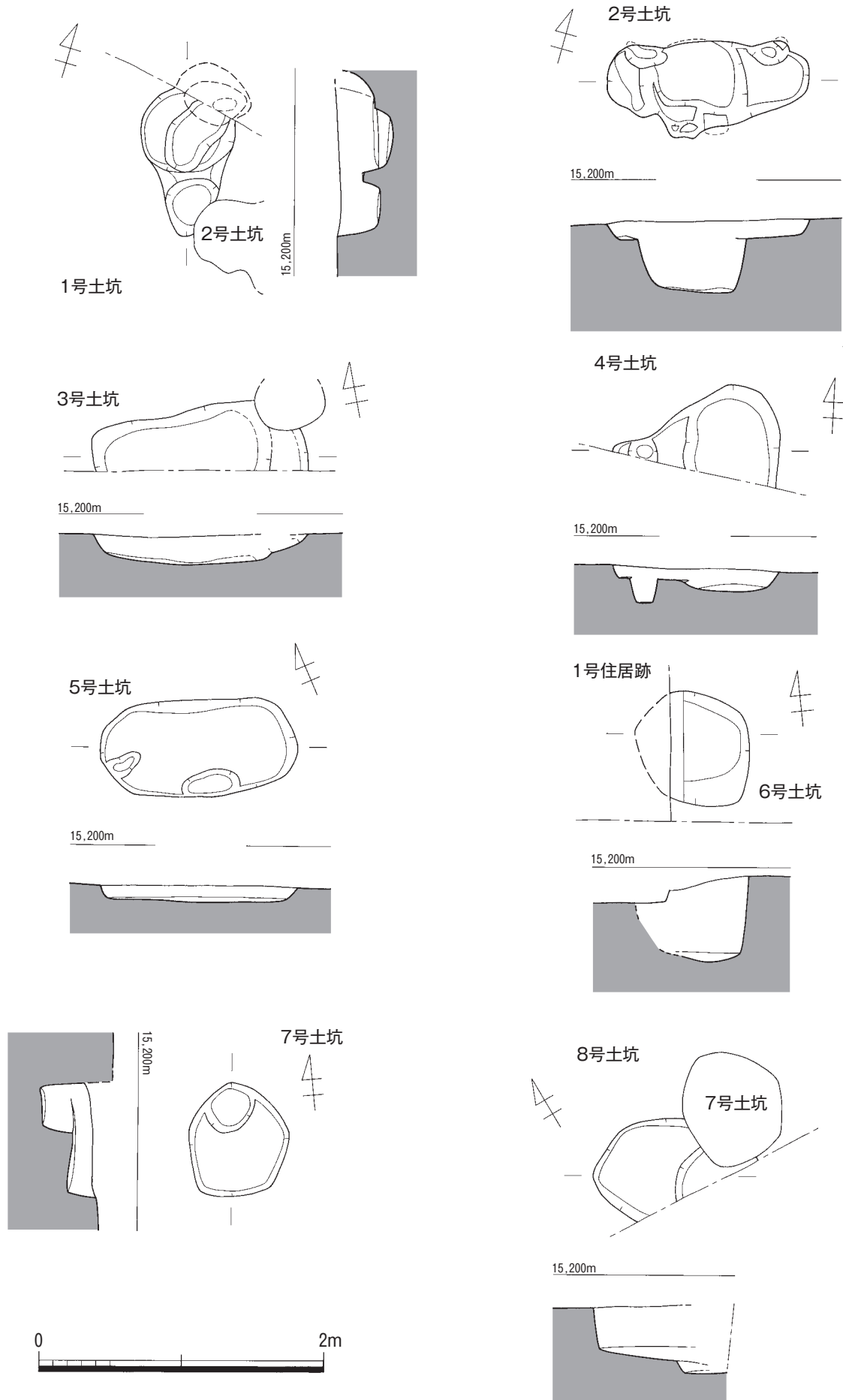
12は甕である。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら口縁端部までのびる。頸部には断面三角形の突帯が貼り付けられる。突帯上にハケメが見られるヘラ状工具による連続刺突文が施文される。内外面ともにハケメが施され、内面はナデ消される。13は甕底部である。内外面ともにハケメ調整が施される。

14号土坑 (B-3区 SK3)

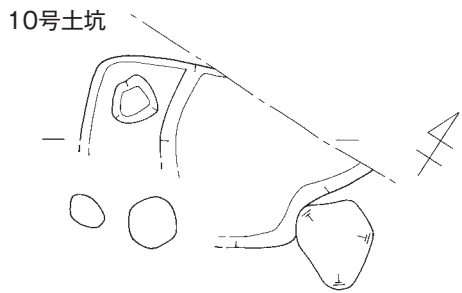
3区で検出された土坑である。平面プランは隅丸長方形に近い楕円形状を呈し、北東側にテラスをもつ。南西側には足掛け状のテラスをもつ。長軸1.14m、短軸92cm、深さ78cmを測る。床面の平面プランは歪な楕円形である。出土遺物なし。

15号土坑 (B-4区 SK1)

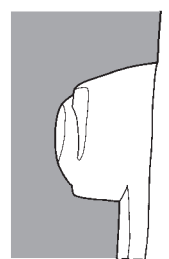
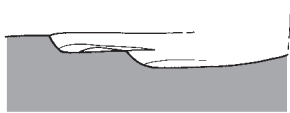
4区で検出された土坑である。南側は調査区外へと続くが、平面プラン円形を呈すと考えられる。長軸86cm、深さ17cmを測る。近世の所産と考えられる。出土遺物なし。



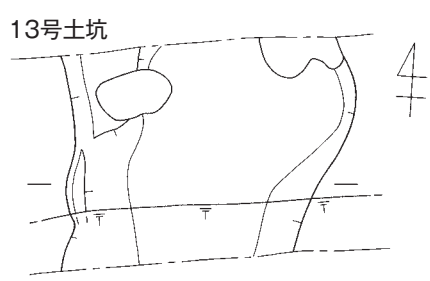
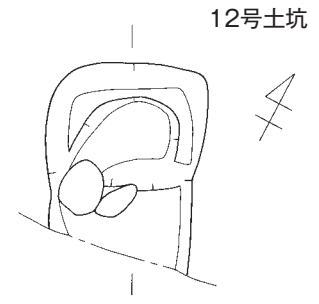
第7图 B区 土坑实测图① (S=1/40)



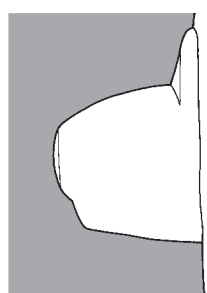
15.600m



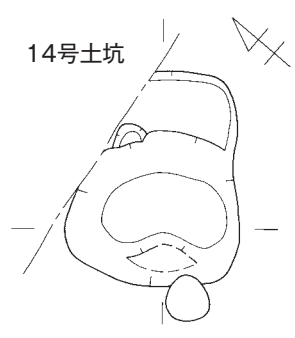
15.600m



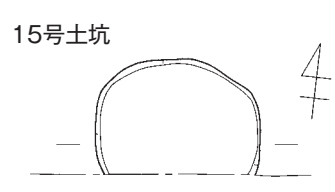
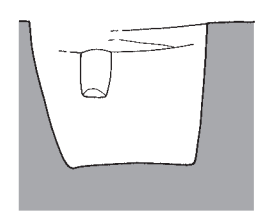
15.600m



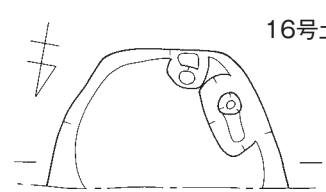
15.600m



15.600m



15.000m



14.800m



第8图 B区 土坑实测图② (S=1/40)

16号土坑 (B-4区 SK2)

4区で検出された土坑である。北側は調査区外へと続く。平面プランは残存部で隅丸の台形状を呈する。長軸87cm、短軸は40cm以上となる。深さ9cmを測る。出土遺物なし。

(3) 井戸 (第9図 図版7-1~3)

1号井戸 (B-1区 SE1)

平面プランはやや楕円形を呈し、検出面で長軸102cm、短軸86cm、深さは73cmを測る。南東側にテラスをもつ。床面の平面プランは隅丸方形で一辺41~44cmを測る。埋土は大きく分けて、上面にシマリの強い灰褐色粘質土、中層に灰黒色粘質土、下層に淡灰黒色砂質土で構成され、自然堆積である。湧水なし。出土遺物は下層から中層にかけてわずかに出土した。土師器坏1点のほかは細片のため図示しえなかった。

出土遺物 (第12図 図版8-10)

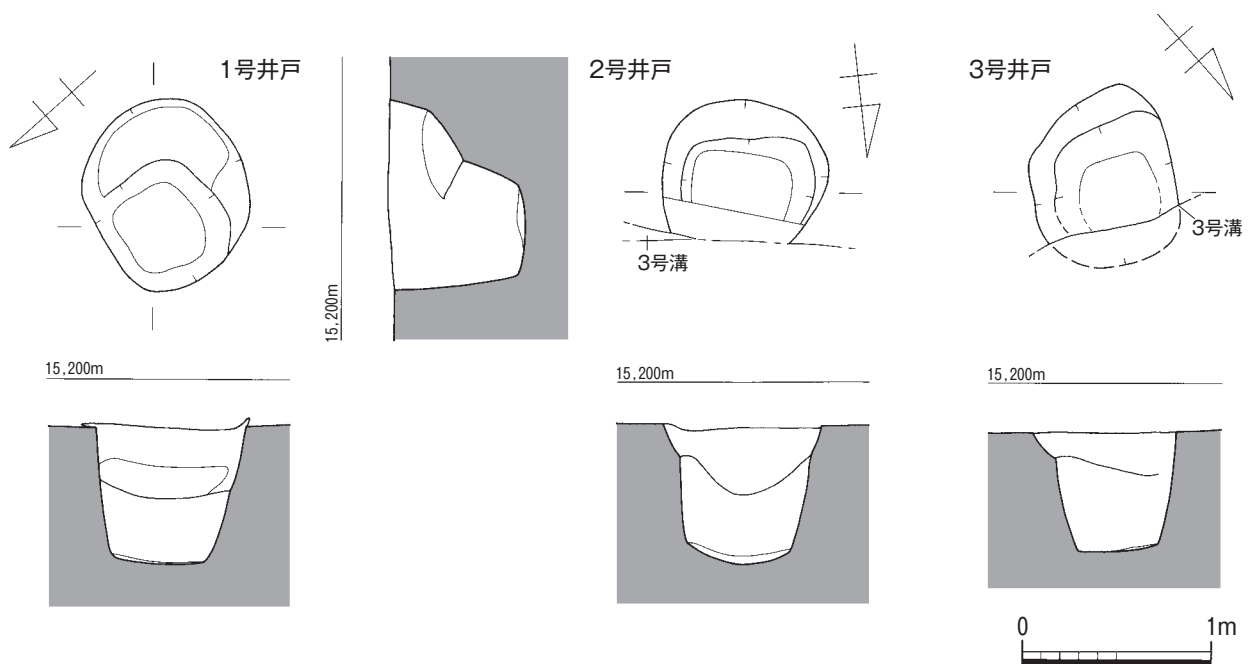
9は土師器坏である。踏ん張った形状の高台をもつ。底部内面には強い指ナデの痕が残る。

2号井戸 (B-1区 SE2)

1号井戸と近接して検出された井戸で、平面プラン円形を呈する。3号溝に切られる。検出面で幅86cmを測る。深さは73cmを測る。床面の平面プランは隅丸方形で一辺52cmを測る。埋土は1号井戸と同様であった。湧水なし。出土遺物なし。

3号井戸 (B-1区 SE3)

1、2号井戸と並んで検出された井戸で、平面プランやや楕円形を呈する。3号溝に切られる。長軸91cm、短軸74cm、深さは64cmを測る。床面の平面プランは隅丸方形で一辺41cmを測る。埋土は1号井戸と同様であった。湧水なし。出土遺物なし。



第9図 B区 井戸実測図 (S=1/40)

(4) 溝 (第10、11図)

1号溝 (B-1区 SD1)

ほぼ南北方向の軸をとる溝である。南側、北側は調査区外へと延びる。幅155cm、深さ27cmを測る。土師皿が1点出土したが、細片のため図示しえなかった。

2号溝 (B-1区 SD2)

西北西から東南東方向に軸をとる溝である。現況で長さ9.9m、幅45~60cm、深さ14cmを測る。出土遺物なし。

3号溝 (B-1区 SD3)

2号溝とほぼ同じ主軸をとる溝である。長さ6.2m、幅90cmを測る。2、3号井戸を切る。1号住居の手前で収束する。出土遺物なし。

4号溝 (B-2区 SD1)

南北方向に軸をとる溝である。幅48cm、深さ11cmを測る。SK1に切られる。出土遺物なし。

5号溝 (B-3区 SD1)

南北方向に軸をとる溝である。幅68cm、深さ17cmを測る。攪乱に切られる。出土遺物なし。

6号溝 (B-3区 SD2)

やや弧状となる溝である。西側はピットに切られる。幅39cm、深さ10cmを測る。出土遺物なし。

7号溝 (B-3区 SD3)

B-3区東端で検出された溝である。東西方向に軸をとる。ピットに切られる。幅40cm、深さ6cmを測る。出土遺物なし。

8号溝 (B-4区 SD1)

北北東から南南西への軸をとる溝である。幅は北側で40cm、南側で81cmを測り、南側が幅広となる。深さ8cmを測る。出土遺物なし。

9号溝 (B-4区 SD2)

北東から南西への軸をとる溝である。北側にわずかに段落ちがみられる。残存長2.98m、幅42cm、深さ9cmを測る。出土遺物なし。

10号溝 (B-4区 SD3)

ほぼ南北の軸をとる溝である。幅109cm、深さ40cmを測る。底面付近から磁器片が出土した。土層および出土遺物から近世の所産と考えられる。

出土遺物 (第12図 図版9-1)

14は磁器碗である。外面に文様が描かれるが山水文か。見込みには文字が描かれるが一部しか残存していないため判読できない。「寿」であろうか。

11号溝 (B-4区 SD4)

北北西から南南東方向の軸をとる溝である。幅90cm、深さ14cmを測る。出土遺物なし。

12号溝 (B-4区 SD5)

北北東から南南西方向の軸をとる溝である。13号溝と隣接する。北側は調査区内で収束する。現存長92cm、幅39cm、深さ4cmを測る。出土遺物なし。

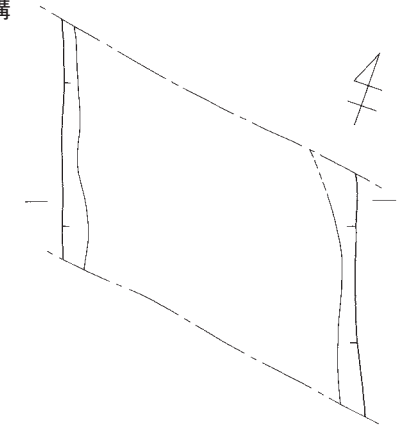
13号溝 (B-4区 SD6)

12号溝に隣接する溝である。南側から北東側へとやや弧状に延びる。北側は調査区内で収束する。現存長1.53m、幅35cm、深さ7cmを測る。出土遺物なし。

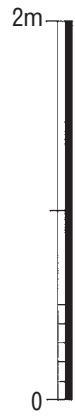
14号溝 (B-4区 SD7)

北北西から南南東方向の軸をとるやや蛇行する溝である。幅47cm、深さ12cmを測る。出土遺物なし。

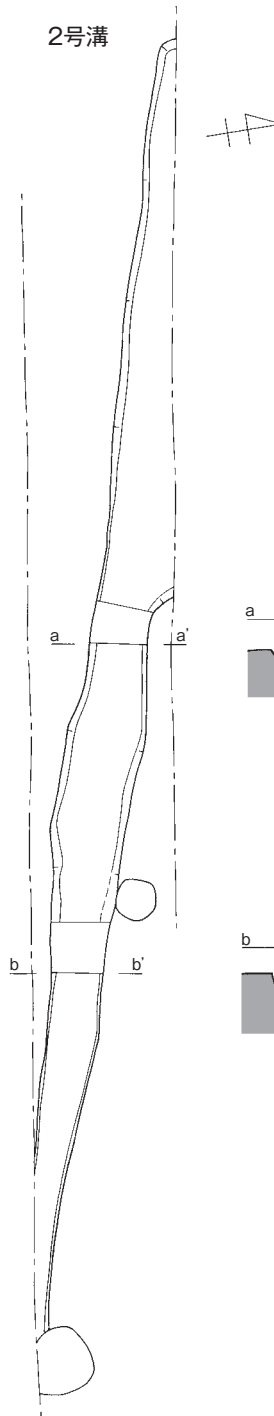
1号溝



15,200m



2号溝



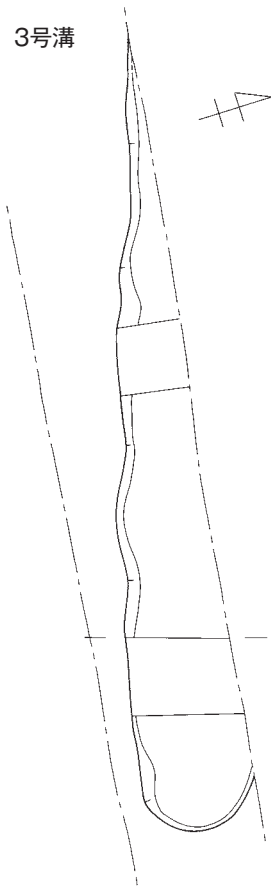
a 15,200m a'



b 15,200m b'



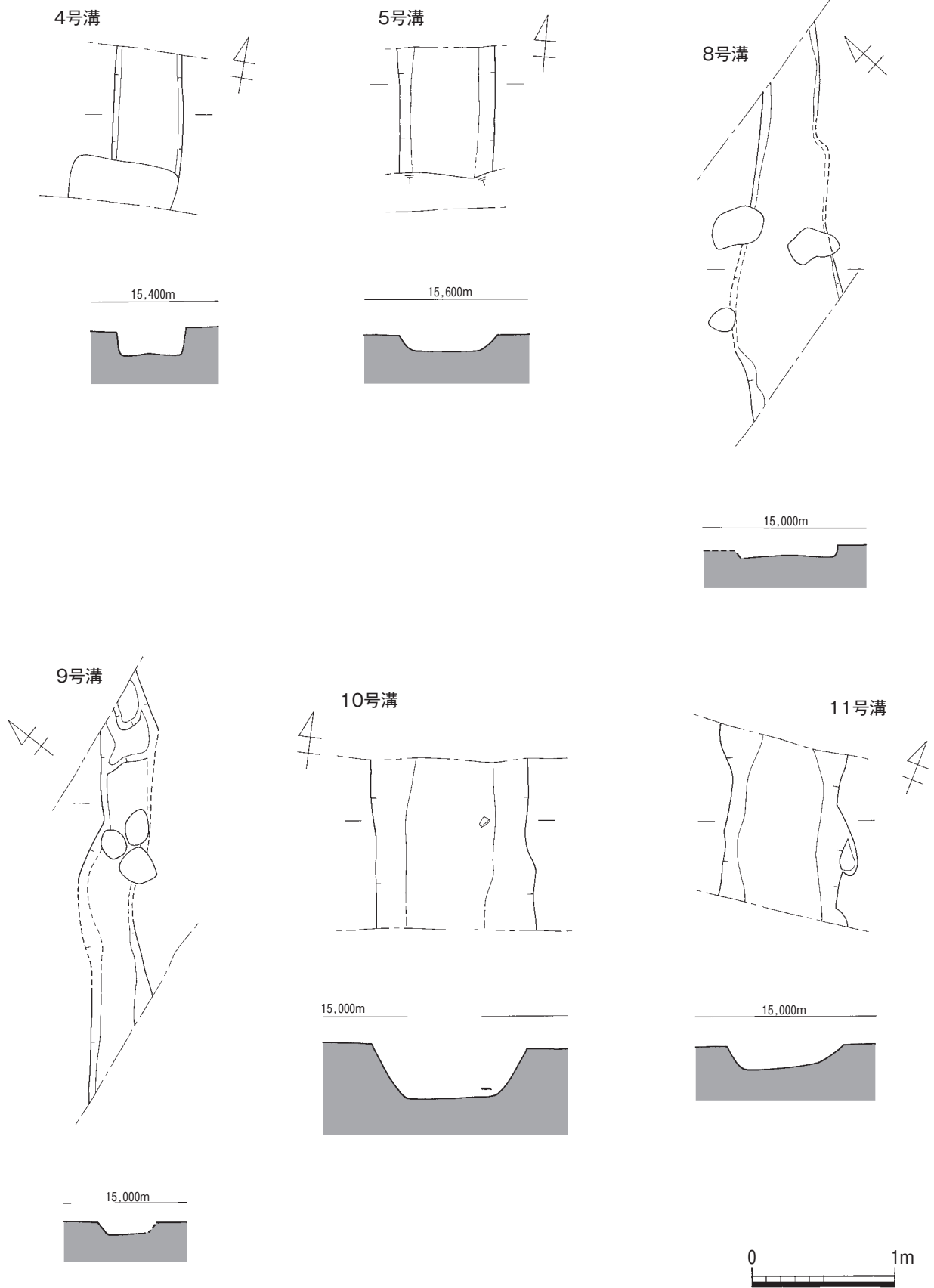
3号溝



15,400m

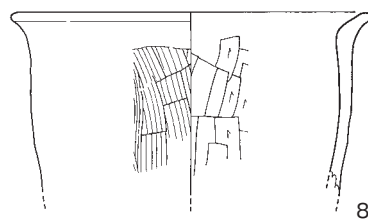
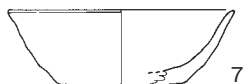
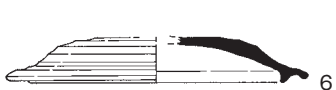
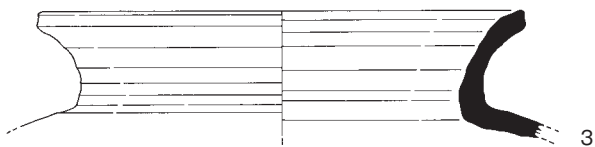
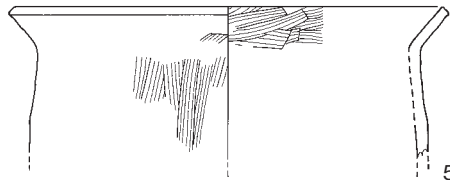
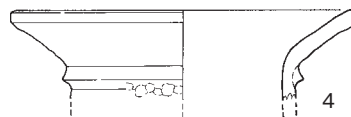


第10図 B区 溝実測図① (1号溝はS=1/40、2・3号溝はS=1/60)

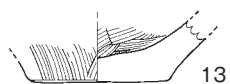
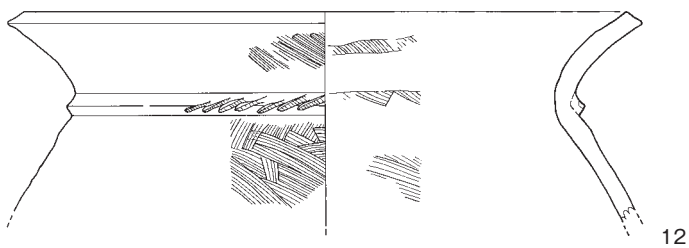
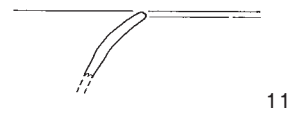
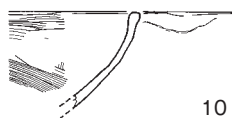
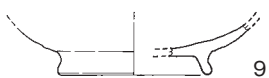


第11図 B区 溝実測図② (S=1/40)

B-1区



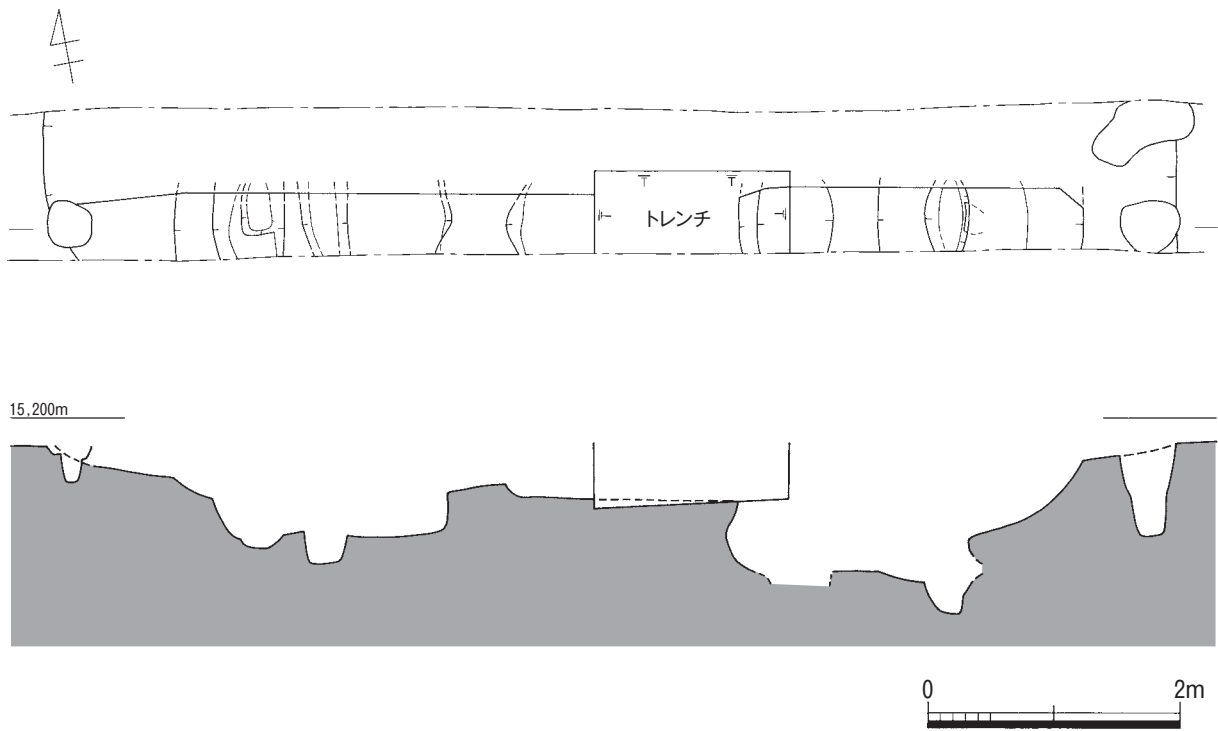
B-3区



B-4区



第12図 B区 住居跡・土坑・井戸・溝出土土器実測図 (S=1/4)



第13図 B区 流路跡実測図 (S=1/60)

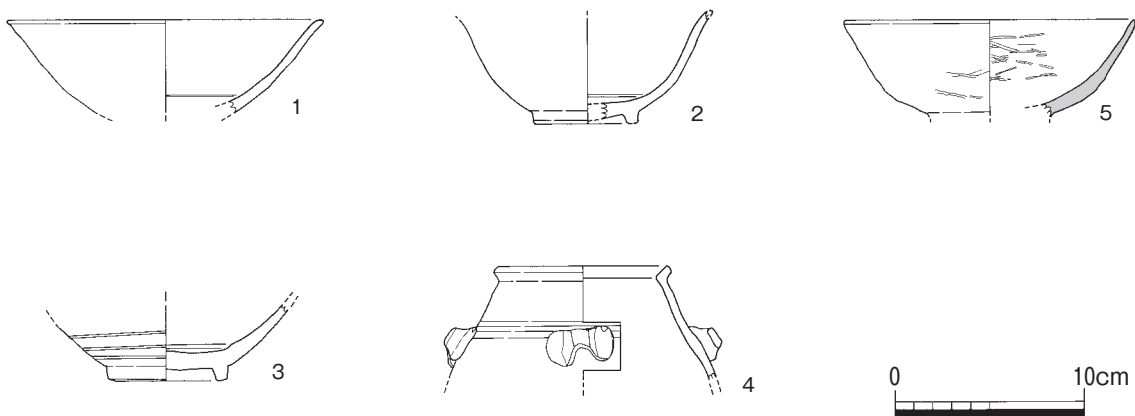
(5) 流路跡 (第13図 図版7-4)

流路跡 (B-1区 流路)

1区で検出された2条の流路跡である。時間的な制約から完掘できていない。流路跡の上面は浅い窪地状となっている。西側の流路跡は幅3.5m、深さ98cmを測る。東側は幅2.74m、深さ1.05mを測る。埋土はいずれも砂層と粘質土の互層堆積である。断面からは一部人為的な掘り込みと考えられる立ち上がりが見とめられる。図示しえなかったが出土した磁器小片から近世の所産と考えられる。

出土遺物 (第14図 図版9-2~6)

1から3は青磁碗である。1は内面に1条の圈線がめぐる。体部から口縁部へ直線的にのび、口縁端部はわずかに外反させる。2は底部から口縁端部にかけて丸みを持って立ち上がり、口縁端部で緩やかに外反する。底部は削り出し高台。3は削り出し高台で、外面はハケメ後回転ヘラケズリを行なうが、工具痕が沈線状に3条めぐる。4は白磁の四耳壺もしくは二耳壺である。口縁端部は強く外側に屈曲させる。耳は粘土帯を貼り付けたもの。5は瓦器碗である。内面ミガキ後ナデでミガキがナデに消される。



第14図 B区 流路跡出土土器実測図 (S=1/4)

3. C区の遺構と遺物

C区は、西側から1～6区に分割して調査を実施した。1区は遺構検出面で標高14.9mを測る。木棺墓を1基検出したほか目立った遺構はみられない。西側は攪乱を受ける範囲が多いが、攪乱の合間にピットが数基みられる。2区は標高14.3～14.6mとなる。1区から1段下がり、住居跡が1軒検出された。3区は標高14.6～14.8mで西側に緩やかに傾斜する。主な検出遺構は溝1条、ピットで遺構数は少ない。遺構面は暗褐色粘質土で、そこから約10cmの深さで地山となる。4区の主な検出遺構はピットのみである。西側は遺構がみられない空間地である。遺構検出面の標高は14.9～15.2mで西側へ緩やかに傾斜する。5区の主な検出遺構は住居跡1軒、土坑1基、ピットである。遺構検出面の標高は15.2～15.4mとなる。調査区西端を最高所とし、東側へ緩やかに傾斜する。6区は調査時に耕作中であったため、一部しか調査が実施できていない。遺構検出面の標高は14.9～15.0mで、西側へ緩やかに傾斜する。東側で遺構が減少する傾向がみられる。C区はC-5区を最高所とし、C-2区まで約1.1mの標高差をもちながら緩やかに傾斜する旧地形である。

(1) 住居跡 (第16図 図版7-5、6)

1号住居跡 (C-2区 SC1)

2区で検出された竪穴住居である。西側は調査区外へと延びている。壁面土層観察では西側の立ち上がりは確認できず、規模は不明である。埋土は不自然な堆積を示していることから、上層は攪乱を受けていると考えられる。現況で一辺430cm程度、深さは22cmを測る。中央から西側にかけて、貼り床と考えられる硬化面を確認している。東側は貼り床と同様の明黄褐色土を基調とし、黒色土、灰黒色土ブロックを多く含むが、硬化面はみられない。出土遺物なし。

2号住居跡 (C-5区 SC1)

5区で検出された竪穴住居である。規模は一辺350cm、深さ33cmを測る。東壁は立ち上がりが不明瞭である。南壁でトレンチを掘削し、深さ33cmほどで地山を検出したため、当初、溝状の遺構と考えていた。遺構掘削中に部分的な硬化面がみられたため、住居と判断したが、南側の硬化していない貼床の一部を掘削してしまっている。貼り床の硬化面は北側から中央部、西側に認められ、南壁付近では硬化がみられない。西側壁からは明瞭な周壁溝が確認された。出土遺物は東壁付近で出土した須恵器坏身1点である。遺構検出時に出土したため、流れ込みの可能性がある。

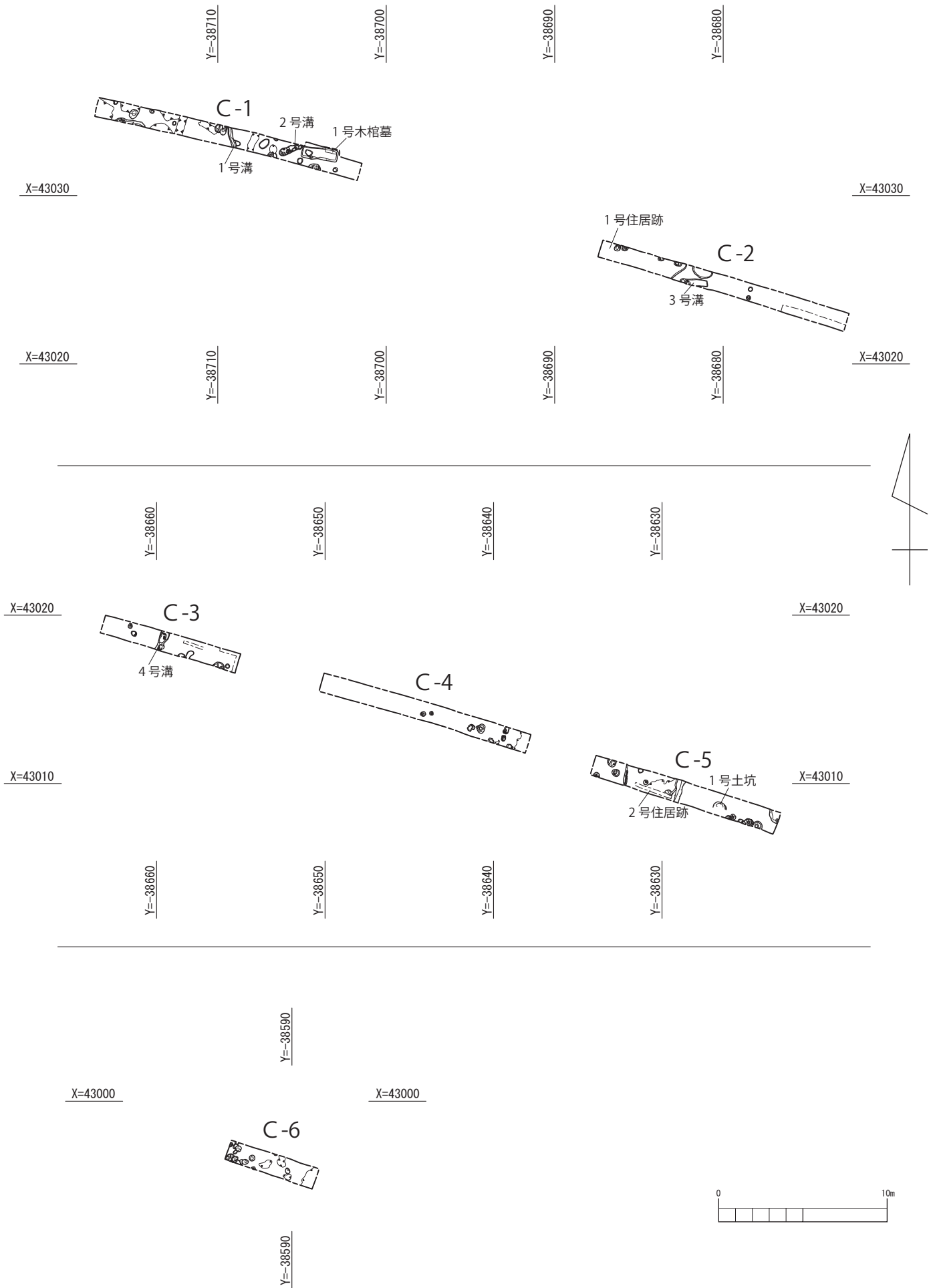
出土遺物 (第17図 図版9-18)

2は須恵器坏身である。底部付近からやや強く屈曲し、口縁部まで直線的に立ち上がる。口縁端部はわずかに外反させ、丸くおさめる。高台は短く厚いしっかりしたものである。

(2) 土坑 (第18図)

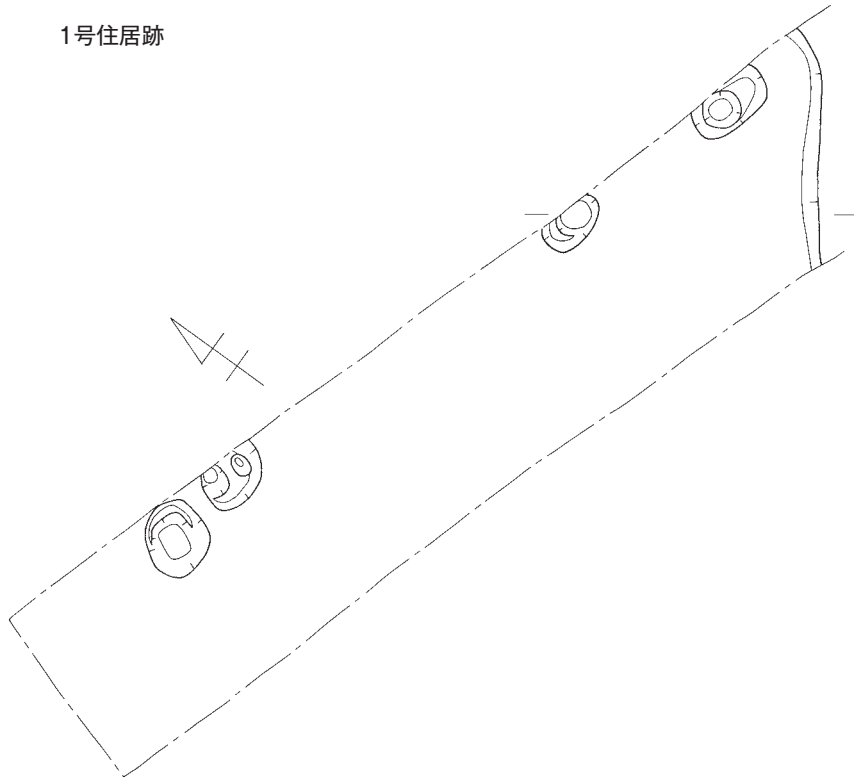
1号土坑 (C-5区 SK1)

5区で検出された土坑である。調査期間の制約から完掘できていない。平面プランは円形で、規模は長軸80cm、短軸65cm、深さは最大で70cmを測る。出土遺物はいずれも細片で図示しえなかった。



第15图 C区 遺構全体图 (S=1/300)

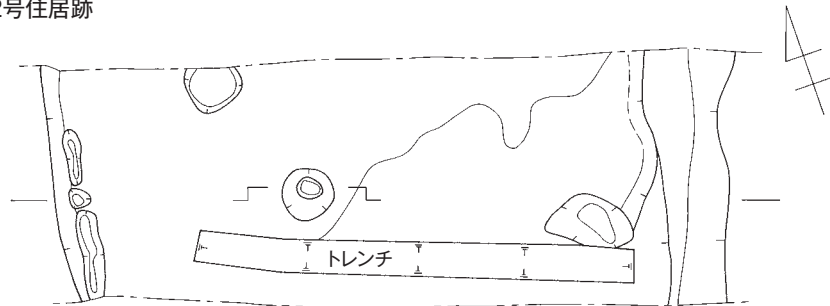
1号住居跡



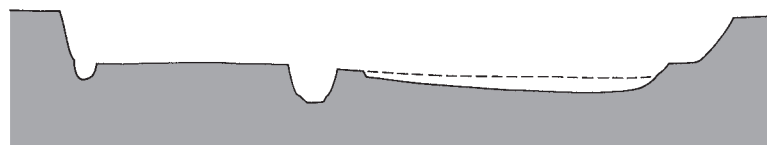
15,000m



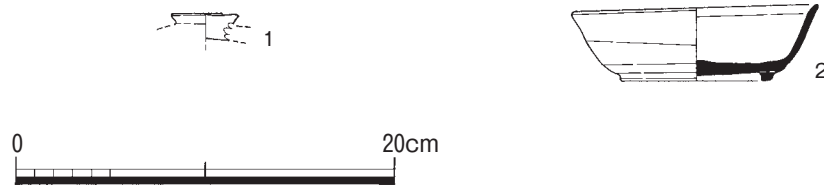
2号住居跡



15,500m



第16図 C区 住居跡実測図 (S=1/40)



第17図 C区 住居跡・溝出土土器実測図 (S=1/4)

(3) 木棺墓 (第18図 図版7-8)

1号木棺墓 (C-1区 SM1)

1区で検出された木棺墓である。当初、平面プランから調査区北側に続く住居跡と考えていた。完掘後に調査区壁面に地山の立ち上がりを確認したため、調査区を拡張し全容を確認した。上記の経過から土層観察による木棺痕跡の確認はできていない。掘り方から木棺墓と考えているが、木棺痕跡を確認できていないため土坑墓の可能性も考えられる。規模は長軸214cm、短軸73cm、深さは最大で48cmを測る。埋土は主に灰黒色土であるが、中央付近で黄褐色土ブロックをわずかに含む灰黒色土がみとめられた。埋土中から須恵器、土師器がわずかに出土しているが、いずれも細片であり、図示しえなかった。床面付近から遺物の出土はなかったため、帰属時期は不明である。

(4) 溝 (第18図)

1号溝 (C-1区 SD1)

1区で検出された溝である。1号木棺墓に隣接する。幅27cm、深さは12cmを測る。土師器坏蓋のつまみが出土した。

出土遺物 (第17図 図版9-17)

1は土師器坏蓋である。ボタン形のつまみ部分のみで天井部はややくぼむ。最大径3.6cmを測る。

2号溝 (C-1区 SD2)

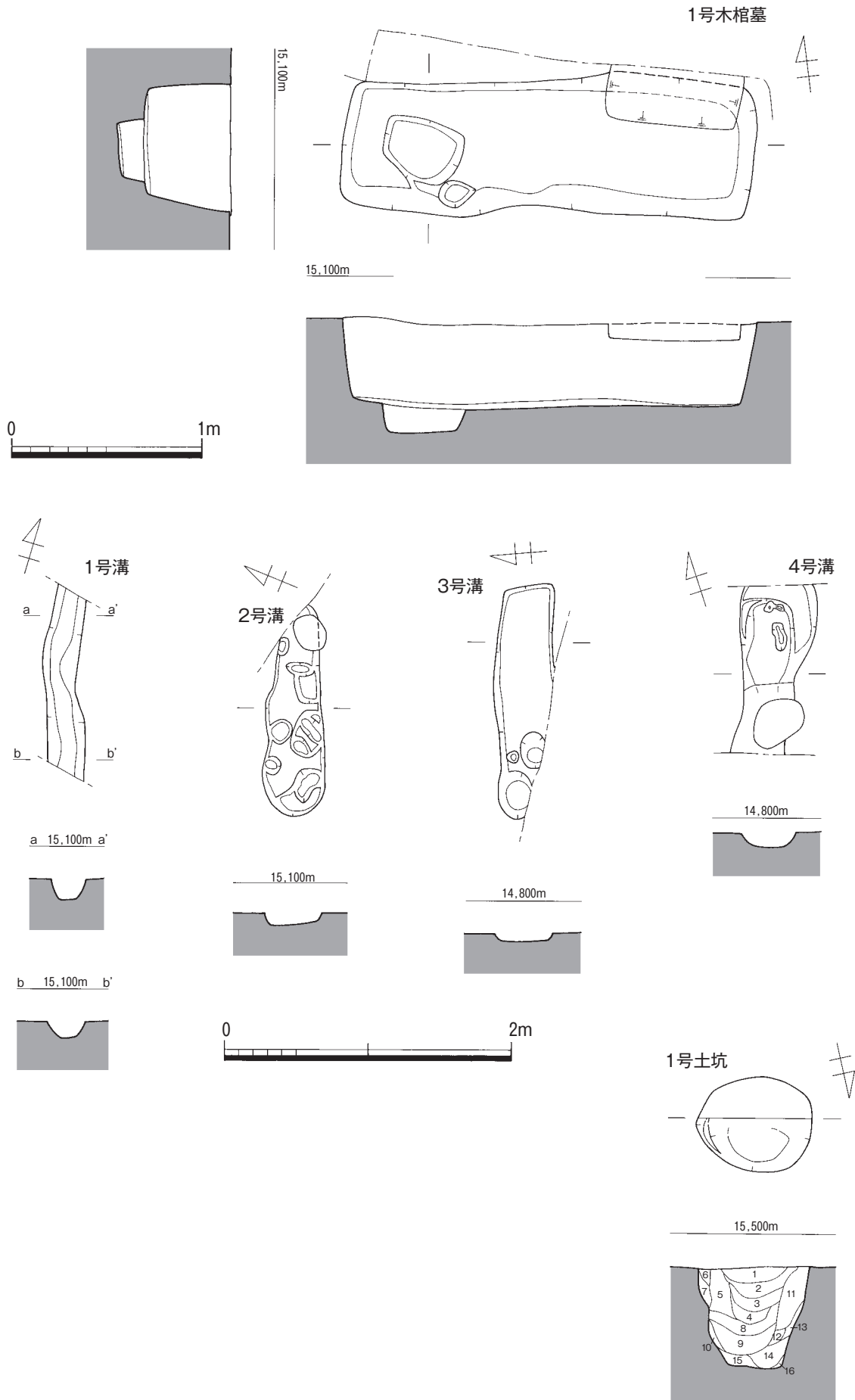
1区で検出された溝である。幅38cm、深さ11cmを測る。出土遺物なし。

3号溝 (C-2区 SD1)

2区で検出された軸を東西にとる溝である。東側は調査区内で収束し、現況で長さ1.38m、幅40cm、深さ10cmを測る。出土遺物なし。

4号溝 (C-3区 SD1)

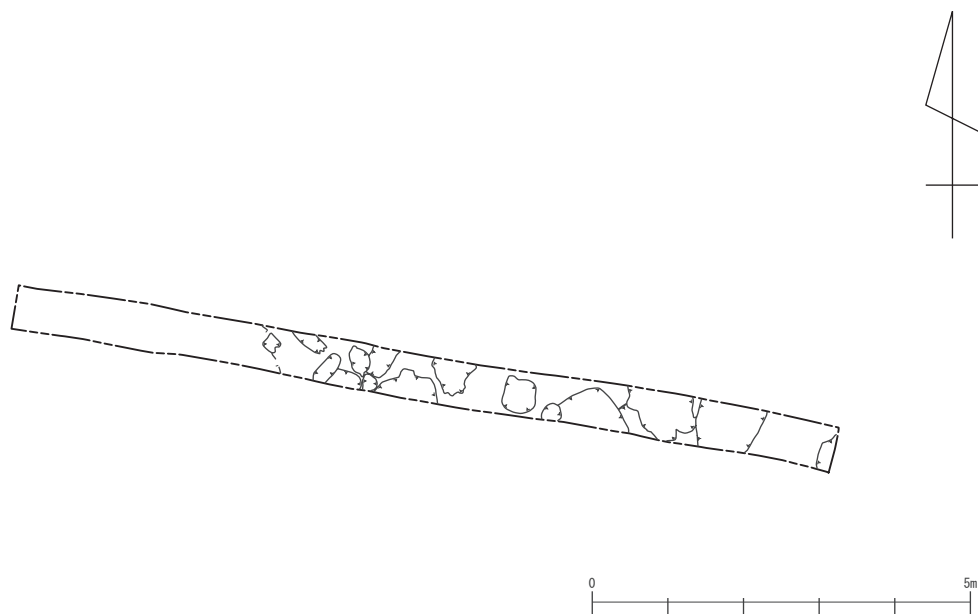
3区で検出された溝である。ピットに切られる。北北東から南南西方向の軸をとる。幅35~53cm、深さ7cmを測る。出土遺物なし。



第18図 C区 木棺墓・土坑・溝実測図（木棺墓はS=1/30、他はS=1/40）

4. D区の遺構と遺物

D区は平成26年度に調査を実施した。平成25年度に調査を実施したC-1区の西側隣接地である。C-1区で木棺墓が検出されていることから墓が検出される可能性を考えていたが、調査区は攪乱を受けており遺構は確認できなかった。しかしながら、C区の遺構状況から攪乱によって削平されているとは考えにくく、空間地帯と考えられる。遺物も出土していない。調査区西側では緩やかな傾斜が始まる地形変換点を確認された。試掘調査の結果からは調査区西側が谷部であることが確認されており、この谷部へと続く緩やかな傾斜面と考えられる。



第19図 D区 遺構全体図 (S=1/100)

第5章 調査の成果

下岩田石仏遺跡で検出された主な遺構は竪穴住居7軒、土坑19基、木棺墓1基、井戸状遺構4基、溝19条、流路2条、ピット約400基である。出土遺物から弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期から古代にかけての集落遺跡であることが明らかとなった。

遺構の分布は大きく分けて、A・B区に弥生時代後期から古墳時代前期の集落。B区とC区の間は谷状の地形となっており、C区には古墳時代後期から古代にかけての遺構が分布する。A・B区では住居跡がB-1区を南北に流れる流路付近に分布する。B-2区と3区の間は攪乱のため様相が不明であるが、B-3から4区にかけて住居跡は検出されていない。平成3年度に実施された下岩田南諏訪遺跡の調査では、8世紀前後の掘立柱建物3棟が重複して検出されており、当調査区にも掘立柱建物が存在した可能性は考えられよう。

周辺住民の聞き取り調査から

周辺の歴史環境については発掘調査例が少ないため、不明な点が多い。調査期間中に地域住民から周辺環境の移り変わりについて多くを聞くことができたため、ここにまとめ、記載する。

まず本遺跡の所在する台地であるが、現在、下岩田石仏遺跡と並行して走る県道は、西の下岩田交差点からやや蛇行しながら台地が上がっている。旧来、台地へは現在の道路よりやや南側に位置する「サヤンカミ（サヤノ神）」を祀った祠が建てられている付近から急な斜面が利用されていた。西と南側に開けた眺望の良い台地であったようである。

今回の調査区の北側に広がる畑では、耕作中に数箇所で大形の土器が発見されている。その形状と規模から、この大形の土器は甕棺墓と想定される。また、出土地点を地図上で確認していくと、標高15m前後の台地縁辺に沿って墓地が形成されていることが推測される。出土した遺物は現存しておらず、内容を確認することができなかつたため詳細な時期は不明である。また、西側の台地先端部では過去に箱式石棺墓と考えられる板石の棺と勾玉が出土しており、出土遺物は小郡市埋蔵文化財調査センターにおいて保管されている。台地縁辺部には弥生時代から古墳時代にかけての墓域が展開しているものと推測される。

遺跡名を冠した小字名の「石仏」や隣接する「阿弥陀堂」から、当該地には寺院が存在していたことが想定されるが、周辺住民からは寺院やそれにまつわる伝承の類は残っていないと伺っている。石塔や石像などの関連する出土遺物もみられなかった。しかし、調査区のほぼ中央部分を南北に貫く農道が薩摩街道から「阿弥陀堂」まで延びており、参道の名残である可能性も考えられよう。今回の調査では、わずかであるが中・近世の遺物が出土しており、当該期に短期間営まれた寺院が存在した可能性は考えられる。第2章で述べたように、元禄10（1697）年以前に創建された九品宗東光寺は寛延2年（1749）までには廃寺となっている。これが該当する可能性は考えられるが、遺構、遺物が検出されていないため、すべて推測の域をこえない。

下岩田南諏訪遺跡の発掘調査が実施されたNOSAI福岡総合センター前の道路下には、本来幅6尺ほどの溝が南東側へと流れていたようである。溝の深さは不明である。しかしながら、B-4区の本来の高さは現況道路と同じ高さであったが、畑地の整地の際、上記の溝を埋めるために段下げしているようである。旧地形はやや起伏のある台地であったことがうかがえる。B-4区を削った土で溝を埋めたと伺った。周辺には農業用水路以外に川はなく、水源は不明であるが、調査区の北側には「清水場」という小字名が残っており、今回の調査地と並行する県道ができる以前は湧水があったとのことである。ここから湧き出た水が源流であった可能性は考えられよう。この溝の先は、「鶴小屋」へとつながっていたとのことである。現在、この溝は道路となっており、鶴番小屋の推定地まで延びていることから、南に鶴番小屋があったことが推定される。今後も地域住民の聞き取り調査を行ない、その位置と関連する伝承を記録する必要がある。

第1表 出土土器観察表

器種=弥：弥生土器、須：須恵器、土：土師器、瓦：瓦器、陶：陶器、磁：磁器
 法量=口：口縁、高：器高、底：底径、胴：胴部最大径、()は復元径・残存高
 成形・調整=口：口縁部、体：体部、底：底部

出土遺構	挿図番号	図版番号	器種	法量 cm (復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整	備考	
B-1区	1号住居跡	第12図1	図版81	須・坏蓋	口：(17.2) 高：(2.2)	内・外：灰	黒色土粒を少し含む	不良	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ	焼きぶくれにより器壁が歪む
	2号住居跡	第12図2	図版82	須・坏蓋	口：(12.6) 高：(2.1)	内・外：灰	1mm以下の砂粒をごくわずかに含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ	やや歪みあり
	3号住居跡	第12図3	図版83	須・甕	口：(25.8) 高：(6.7)	内：浅黄橙 外：橙	1mm以下の砂粒をごくわずかに含む	不良	口：内：ナデ 外：タタキ後ナデ 体：内：当て具痕 外：ナデ	還元されず土師質 頸部内面に当て具痕が残る
	1号土坑	第12図4	図版84	土・壺	口：(18.2) 高：(4.9)	内：浅黄 外：灰黄	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	口：内：ヨコナデ 外：ミガキ後ナデ 体：内外：ヨコナデ	頸部突帯下に指頭圧痕
	1号土坑	第12図5	図版84	土・甕	口：(23.2) 高：(8.1)	内：灰黄褐 外：褐灰	2mm以下の砂粒を多く含む	良好	口：内外：ハケメ後ナデ 体：内外：ハケメ	内面は器壁剥離 外面はスス付着
	2号土坑	第12図6	図版85	須・坏蓋	口：(13.2) 高：(2.4)	内外：灰白	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	口：内外：回転ナデ 体：内：回転ナデ、仕上げナデ 外：ヘラケズリ	上部にはつまみが付くか
	3号土坑	第12図7	図版86	土・坏	口：(12.0) 高：(4.0)	内・外：橙	1mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	口：内外：回転ナデ後ナデ 体：内外：回転ナデ後ナデ	ローリングを受ける
	4号土坑	第12図8	図版88	土・甕	口：(19.0) 高：(9.5)	内：浅黄橙 外：灰白	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	口：内外：ヨコナデ 体：内：ケズリ 外：ハケメ	口縁端部は磨耗する
	1号井戸	第12図9	図版87	土・坏	底：(8.2) 高：(2.8)	内：黄橙 外：橙	赤褐色土粒を少し含む	良好	体：内：指ナデ 外：回転ナデ 底：内外：ナデ	底部内面に強い指ナデ痕
B-3区	12号土坑	第12図10	図版89	土・鉢	口：- 高：(5.2)	内外：にぶい黄橙	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	口：内外：ヨコナデ 体：内外：ハケメ後ナデ 外：不明	口縁端部は倉った素地を未調整 内面ハケメは不明瞭
	12号土坑	第12図11	図版89	土・高坏	口：- 高：(3.5)	内：にぶい黄橙 外：浅黄橙	精良 赤銅色粒子をわずかに含む	良好	口：内外：ヨコナデ 体：内外：ヨコナデ	焼け歪みが大きい
	13号土坑	第12図12	図版810	弥・甕	口：(33.5) 高：(11.2)	内：にぶい橙 外：明赤褐	2mm以下の砂粒を少し含む	良好	口：内外：ヨコナデ 体：内外：ハケメ後ナデ	頸部突帯にヘラ状工具による連続刺突文
	13号土坑	第12図13	図版810	弥・甕	底：7.4 高：(3.2)	内：灰白 外：にぶい黄橙	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	体：内外：ハケメ 底：外：ナデ	
B-4区	10号溝	第12図14	図版911	磁・碗	底：4.4 高：(2.6)	内外：灰白	精良	良好	体：内外：施釉 底：外：施釉	外面、見込みに不明文様 見込みは「寿」か
B-1区	流路跡	第14図1	図版912	磁・碗	口：(16.7) 高：(5.0)	内外：灰白	精良	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ	底部付近は一部露胎
	流路跡	第14図2	図版913	磁・碗	口：(5.5) 高：(5.95)	内外：明オリーブ灰	精良	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ 底：外：削り出し高台	底部は削り出し高台
	流路跡	第14図3	図版914	磁・碗	口：6.2 高：(4.2)	内外：灰白	精良	良好	体：内：施釉 外：ハケメ後ヘラケズリ 底：内：仕上げナデ 外：削り出し高台	内面見込みは重ね積みによる蛇の目状 外面にヘラケズリによる工具痕が沈線状にめぐる
	流路跡	第14図4	図版915	白磁：壺	口：(9.4) 高：(6.1)	内外：灰白	精良	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ	二耳か四耳か不明
	流路跡	第14図5	図版916	瓦・椀	口：(18.2) 高：(5.1)	内外：灰	1mm以下の砂粒をごくわずかに含む	不良	口：内外：回転ナデ 体：内外：ミガキ後回転ナデ	焼成不良のため須恵質 ミガキ後ナデ調整だが光沢面を少し残す
C-1区	1号溝	第17図1	図版917	土・坏蓋	最大径：3.6 高：(1.4)	内外：明赤褐	精良	良好	体：内外：ナデ	坏蓋つまみ部のみ
C-5区	2号住居跡	第17図2	図版918	須・坏	口：13.0 底：8.1 高：4.0	内外：灰	精良	良好	口：内外：回転ナデ 体：内外：回転ナデ	やや歪みあり



下岩田石仏遺跡 遠景（南上空から花立山を望む）



下岩田石仏遺跡 遠景（西上空から下高橋官衙遺跡を望む）

図版2



1. A区全景（西上空から）

2. A-1区（真上から）

3. A-2区（真上から）

4. A-3区（真上から）

5. A-4区（西上空から）





1. B-1区 (東上空から)

2. B-2区 (真上から)

3. B区攪乱 (真上から)

4. B-3区 (真上から)

5. B-4区 (真上から)



図版4



1. C区全景（西上空から）

2. C-2区（真上から）

3. C-3区（真上から）

4. C-4区（真上から）

5. C-5区（真上から）





D区 全景
(東上空から)



D区 全景
(真上から)

图版6



1. A-3区 1号住居跡完掘状况



2. A-3区 2号住居跡完掘状况



3. B-1区 1号住居跡完掘状况



4. B-1区 2号住居跡完掘状况



5. B-1区 3号住居跡完掘状况



6. B-1区 1号土坑完掘状况



7. B-1区 6号土坑完掘状况



8. B-3区 12号土坑完掘状况



9. B-3区 13号土坑完掘状况



10. B-3区 14号土坑完掘状况



1. B-1区 1号井戸完掘状况



2. B-1区 2号井戸完掘状况



3. B-1区 3号井戸完掘状况



4. B-1区 流路跡完掘状况



5. C-2区 1号住居跡完掘状况



6. C-5区 2号住居跡完掘状况



7. C-1区 木棺墓完掘状况



8. C-1区 木棺墓完掘状况

图版8





報告書抄録

ふりがな	しもいわたいしほとけいせき
書名	下岩田石仏遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第295集
編著者名	龍孝明
編集機関	小郡市教育委員会
所在地	〒838-0198 福岡県小郡市小郡255-1 TEL 0942-72-2111
発行年月日	2015（平成27）年3月27日
保管場所	[遺物]・[図版]・[写真] 小郡市埋蔵文化財調査センター
保管場所所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5147-3 TEL 0942-75-7555

ふりがな	ふりがな	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地							
しもいわたいしほとけ 下岩田石仏 遺跡	福岡県 おごおりし 小郡市 しもいわた 下岩田	40216		33° 25′ 14″	130° 32′ 43″	2014.01.20 ～ 2014.03.28 2014.09.24 ～ 2014.10.03	1500㎡	歩道新 設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
下岩田 石仏 遺跡	集落	弥生、古墳、 古代、中世、 近世	竪穴住居、 木棺墓、土 坑、井戸、 溝、流路	弥生土器、 須恵器、 土師器、瓦 器、陶磁器	大刀洗町下高橋官衙遺跡と同一台地上に立地する集落遺跡。			

下岩田石仏遺跡

小郡市文化財調査報告書第295集

2015年3月27日

発行 小郡市教育委員会
小郡市小郡255-1

出版 ハイウエーブデザイン
小郡市力武255-44